

数士直紀著

## 『理解できない他者と理解されない自己』

寛容の社会理論』(勁草書房)

二〇〇一年 四六判 二六三頁 二九〇〇円(税別)

本書は数士直紀氏による二番目の単著である。前者『自由の社会理論』(多賀出版、二〇〇〇年)に比して本書はコンパクトで、おそらく一般読者も想定して著されているが、その理論的考察は同じく徹底的なものである。既に本書には宮原浩二郎氏によって洞察に富む書評がなされている(『社会学評論』五二巻三号)。

まずは全六章(序章、終章を含む)からなる本書の内容を、評者の理解に基づいて紹介したい。

本書が扱うテーマは、私たちが「他者と共に生きる際に生じる問題」を理論的に考察し、「他者と共に生きることが可能になるための条件を明確化すること」である。この作業のための題材とされるのは、アロウの民主制の不可能性定理、センのリベラル・パドックス、社会秩序問題、囚人のジレンマ、スパーゲーム、山岸俊男の信頼のパドックス、進化ゲーム、井上達夫の共生の哲学などである。これらのトピック

クの多くは、数理的な手法を用いる日本の社会学者にとって馴染み深いものだが、本書の関心は数理的展開ではなく、知見を解釈し考察を加えて社会理論へと紡ぎ上げることにある。数理的手法についての予備知識は読者に求められておらず、これ以上ないと言えるほどの平易な説明が施されている。本書はそれらのトピックについて学ぶための情報源としても利用できると思う。

序章「相互理解という幻想」では、本書の課題が示される。それは、「私と他者との間で言語化されなければならない新しい型の相互理解がどのようなものであるのかを明らかにし、その成否の可能性を検討」することである(一八頁)。これまでの共同体内での相互理解は「暗黙の相互理解」である。

ガーフインケルの期待破棄実験において被験者が暗黙知を説明しようとはしないこと、またわれわれが日常生活で、当たり前とされていると思われることについてあえて「説明を求めるという行為」を取らないことは、従来の相互理解の「虚構性」を示している。グローバリゼーションによって現代社会では、私にとって「相互理解が単なる思い込みでしかないような他者」と出会う可能性が高まるので、他者との協同が成立するためには、新しい「明示的(意識的)相互理解」が必要となる。この相互理解がどのようなものであるのかを説明することが本書の課題である。

第一章「決定することの困難」では、「合意」に至るとい

う意味で他者理解に失敗した際の解決策としてあらかじめ用意しておくべき、社会的決定ルールについて考察がなされる。社会的選択理論は、私と他者とが同時に受容できるような種類の望ましさを備えるルールが、論理的に存在し得ないことを示している。アロウの定理は、成員の意志を平等に尊重するような民主的ルールが存在しないことを、リベラル・パラドックスは、個人の自由意志を尊重するようなルールが存在しないことを導いているのである。ここからの本章の展開はおそらく読者にとって意外なもので、これら不可能性の証明の後に社会的選択理論が自ずと課題とする「社会的決定から決定不可能な事態を排除しようとする志向性」に対して著者は距離をとる。その理由は以下である。私が「自由である」ことの根拠は他者の存在と不可分であるが、同時に他者の存在は私が「自由である」ことを否定する根拠でもある（このことを著者は「自由である」ことの自己否定性とよぶ）。そして、「自由である」ことを権利として尊重する立場から、社会的決定ルールでは決定できないことがありえることをまず認めること、その次に決定できない場合に私たちがすべきことを決めること、このステップを「他者と共に生きる」ことを考える場合に適切だとするのである。以下の章では、決定不可能な事態に直面したときに私たちが採るべき行動の具体的な戦略が検討される。

第二章「理解できない他者と理解されない自己」では、異

質な他者との共生の問題は社会学理論での社会秩序問題と重なること、そして、共生問題を取り扱うには社会システム論での秩序問題の「二重の不確定性問題」という定式化よりも、「囚人のジレンマ」による定式化が適切であることが論じられる。著者によれば、前者は二つの問題をもつ。第一に個人に社会性を仮定して解決を図るという論点先取を犯しており、第二に協力意志をもつ他者の不透明性を問題の核心としているが、利害対立しうる（悪意をもちうる）他者を想定していない点で不徹底である、とみなす。それに対して囚人のジレンマは、利害が対立している他者との協力関係を問題化することができる。また、囚人のジレンマの経験論的分析は信頼の調達メカニズムに焦点をあわせるので、二重の不確定性問題をも取り扱うものとなるし、さらに規範論的分析としては「理解できない他者」との信頼形成の合理性という、可能社会における問題までも扱えるのである。囚人のジレンマによる秩序問題の定式化は、以上のメリットをもつものとされる。

第三章「理解できない／理解されていない」ことの受容」では、スパーゲーム（無限繰り返しゲーム）による囚人のジレンマの解法の意味が検討される。一回限りの囚人のジレンマゲームではプレイヤーが合理的であるかぎり、協力状態（プレイヤーがともに協力行動を選択した状態）の達成は不可能である。しかし、同じゲームが何度も繰り返され、それがいつ終了するのかプレイヤーにはわからないという不確定

性をもつスーパーゲームでは、協力状態が出現する可能性が出てくる。プレイヤーがとり返し戦略（初回だけは相手を信頼して協力行動を選択するけれども、その後は「前回協力してくれた相手に対しては協力するが、裏切った相手に対しては裏切る」ことを続けていくという選択方針）を採用するケースが、ナッシュ均衡（簡単に言えば、安定な状態）になるのである（ただし、唯一のナッシュ均衡ではない）。このようなゲーム理論の知見と信頼調達の問題とはどのように関わるのであろうか。しっぺ返し戦略は、まず、過去の行動実績を踏まえた上で他者を信頼しているのだと解釈できる。

また、初回のゲームにおいては「協力してくれるかどうかかわからないような他者」に対する信頼も存在している。そしてこの信頼にはより高い期待利得という合理的根拠が存在している。

そして、著者は、山岸俊男が指摘した信頼のパラドックス3、すなわち、他者一般への信頼が高い人は他人が協力的かそれとも非協力的かを見分ける能力が高い傾向にある、という実験結果をもとに、「理解すること」「信頼すること」の関係を位置づける。信頼とは、「理解できない／理解されない」という他者と自己との関係を受けとめた上で必要となるものであり、他者の行動を注意深く観察し正確に予測することをともめるものである。

第四章「非合意の合意」では、進化論的な適応／淘汰の観

点からしっぺ返し戦略が検討される。前章のスーパーゲームでは、長期的な視点に立って自己の利得を計算するという高度の計算能力をプレイヤーに要求していたが、そのような高度の合理性の仮定をゆるめられるのが本章の課題である。

アクセルロッドの「囚人のジレンマ」選手権は、さまざまな戦略を有限繰り返しゲームで勝負させ、しっぺ返し戦略が最も高い総合得点をあげることを示した。これは進化の過程においてしっぺ返し戦略が生き残る確率が最も高いことを意味し、そしてそのことにプレイヤーの計算能力は関与していない。そして著者は、しっぺ返し戦略の特徴が、(一)単純で学びやすい、(二)お人好しではない、(三)寛容（忘れっぽい）、(四)他の戦略の侵入を許さないという意味で集団安定性をもっている、という四点にあることを指摘している。

以上の検討をもとに著者は、「理解できない／理解されない」「関係性を相互に受容すること、つまり「非合意に関する合意」の可能性を論じる。これを受容した上に、コミュニケーションの継続と、相互に自己を主張しあうことが必要になる。しっぺ返し戦略とは、「あなたが私に協力してくれるかどうかは、私にはわからない。けれども、私はあなたを信頼し、協力しよう。そして、あなたが私の信頼に応えてくれる限り、私は自分の選択を変えない」と、継続的に自己主張することを意味しているのである。

終章「他者と生きるために」では、他者を受け容れること

にいっそう積極的な意味（特に正義論・規範論的な意義）が与えられ、哲学的な議論が展開される。井上達夫の議論に従えば、私と対立する他者は、私の選択の妥当性を相対化する視点を提示してくれ、私により多様な生の可能性、より善き生を追求するための機会、私が「自由であること」のより高次の意味を与えてくれるものであると言える。しかし著者は、井上の議論が社会的弱者としての他者を受容する議論であることを指摘し、しつぱ返し戦略の翻案として、たとえ私が社会的弱者である場合であっても「相手に寛容さを示しつつ、自己を主張する」という原則を提案する。無条件の寛容でもなく、排除でもない。これが著者の主張する、他者と生きることで、私の善き生を実現するための原則である。

最後に著者はこの原則を適用するための注意点を論じている。まず、他者の「理解できない」という特徴は、程度の差はあっても私をとりまく他者のすべてが有しているので、他者一般への注意力（社会的知性）が、われわれには求められる。また、他者との関係におけるリスクを引き受けることが必要になる。他者と共に生きることに失敗したときでも、「誤りを犯しうる自分を積極的に受け容れる」ことがわれわれに求められる。

以上が、本書の概要である。ずいぶん紙幅を費やしてしまっただが、それでも本書の紹介としては不十分であるように感じてしまう。概要で言及できなかったさまざまな社会理論（例

えば、ハーバマス、ギデンス、大澤真幸、宮台真司などのもの）についても議論の流れの中で解釈され位置づけられており、著者の博学ぶりがわかるとともに、得るところがたいへん大きいだろう。他者、自由、規範、コミュニケーション、正義といった語にこだわりを持つ研究者なら、本書に必ず触発されると思う。多くの人に是非一読を薦めたい。

本書は、今日の社会における他者との相互行為の可能性という観点から、従来の「社会秩序問題論」とでも呼ぶべき領域での議論群に、大きな一つの筋立てを与えているという点で、たいへん意義をもっていると思う。他者との関係の基礎構築を目指して、社会的選択理論、社会システム論、囚人のジレンマ、スーパーゲーム、進化ゲームというトピックが配列され、議論が直線的に進行していく様子は、力強く鮮やかである。誤解を恐れず俗な表現を使えば、本書は、「グローバル社会における人間関係の作法」「困った人（かもしれない人）たちとのつきあい方」に根拠を与える基礎理論、ということができるだろう。著者は、私が「自由である」ことの価値、そして他者との関係による豊かな可能性という価値を根拠として、しつぱ返し戦略の翻案を提案するのである。

さて、ここで疑問点を示しておきたい。第一に、評者にはよくわからなかったのだが、著者が終章で提案する営為「自己を主張する」の具体的内容である。囚人のジレンマ構造での裏切りは、相手プレイヤーに損害を与える意味をもつ。

「自己を主張する」というのは、「いつでも損害を与えられるぞ」という姿勢を示すことなのだろうか。もしそうなら、実際に裏切り行動を選択せずに、経験的・具体的にはどのようなことが可能になることを想定しているのだろうか。

第二に、「相手に寛容さを示しつつ、自己を主張する」ということは、ゲームに参加した上での戦略である。だが、今日問題とすべき点として「ゲームをしない」「ゲームから退出する」という行動選択があると思う。具体的には、他者に対する徹底的に無関心な態度である。このような行動選択は本書の議論に書き込まれているのか、あるいは書き込まれるのか。

第三に、本書の議論と、知識の共有という意味での相互理解との関係である。本書を読みながら、この作法についての（知識の伝達としての）教育について考えていた。何らかの働きかけをしなくとも著者提案の行動戦略が定着するならば、そもそもあえて提案する必要はない。おそらく教育はこの行動戦略の定着に効果をもつと予想できる。教育が効果をもつということは、知識の共有、その意味での相互理解がこの行動戦略の有効性の前提となっていると言えないだろうか。それは著者の否定する「暗黙の相互理解」ではないけれど、行動戦略に何らかの社会性が前提されることを意味しており、その社会性について説明する理論が必要だということにならないだろうか。この点で評者は社会システム論や広義の社会

契約論にまだ意義を見出せると考えている。

以上の疑問に答えがいたただけるならば、本書の意義がいつそう読者に理解されると考える次第である。

（とどろき まこと・金沢大学文学部）

『ソシオロジ』の書評に拙著を取り上げていただいた編集委員会と、的確な書評をしていただけた轟亮氏にまずお礼を申し上げなければならぬ。このような機会を設けていただいて、改めて私自身が設定したテーマから多くのことを学ぶことができたからである。特に、轟氏には、拙著に対して投げかけられた三つの疑問点を含め、実的確かつ正当な評価をしていただいたと思っている。このような確かつ正当な評価に対しては、そこで提示された疑問に対してできるだけ真摯に応えることが私にとっての義務だろう。そこで、轟氏からいただいた疑問点に対してできる限り誠実に答えていこうと思う。

轟氏は、拙著に対して三つの疑問点を提示した。まず、「自己を主張する」といったときの具体的な内容は何なのかということ。次に、他者に対して徹底的な無関心であり続けるという戦略を採るものに対しては、どのように評価するかということ。最後に、教育の効果という観点から相互理解を目指すという戦略は評価できないのかということ。ここでは、この順番にしたがい、それぞれについて私なりの考えを述べていこうと思う。

まず、「自己を主張するとは、どういうことか」という疑問についてだが、この問いに直接に答える前に確認しなければ

ならないことがある。それは、個々の関係を考えた場合には、自己主張は必ずしも成功するとは限らないということである。つまり、相手によっては、自己主張することによって引き起こされるのは単なる不毛な論争でしかなかったり、あるいは単にお互いを傷つけ合うことでしかなかったりする可能性が非常に高いことである。そして拙著は、仮にそうであったとしても、自己主張する態度を保持し続けることが、総合的に考えて一人一人に有利に働かし、望ましくもあるのだということを主張しているのである。その意味で拙著は、「自己主張すれば、必ず道が拓かれる」などとおめでたいことを主張しているわけではない。

この辺の事情をもう少し分かりやすくするために、アクセルロッドの選手権で最も高い総合得点を上げたしっぺ返し戦略の特徴の一つを再確認しよう。それは、しっぺ返し戦略は個々の対戦では一回も勝ったことがなかったのに、総合的には他の戦略に勝利したという点である。例えば、しっぺ返し戦略は必ず裏切りしか選択しない戦略に対しては個別の対戦では勝てない。しっぺ返し戦略は相手が裏切り続ける限り自分も裏切り続けるしかないし、そうすると最初に協力した分だけ裏切り戦略よりも点数が低くなるからである。しかし、裏切り戦略が他の戦略との対戦で思うように得点を上げられず結局は低い総合得点に終わるのに対して、しっぺ返し戦略は他の戦略との対戦においてうまく協力を引き出すことで結

局は高い総合得点を得ることに成功する。つまり、個別の対戦ではしつぱ返し戦略は裏切り戦略に勝てないし、しつぱ返し戦略と裏切り戦略との関係は裏切り合戦にしかならないという意味で不毛なのである。しつぱ返し戦略の重要な特徴の一つは、個別の局面をみればあまり効果があると思えない戦略が、大局的にはもっとも効果があったということであろう。この点を念頭において、轟氏の最初の質問に答えようと思う。「自己を主張する」ことは、相手に対する「協力」を止めることを可能性として含んでいる。もちろん、それがつねに可能性で止まっていることが望ましいことは言うまでもない。しかし、必要なときにそれを選択できなければ、「自己を主張する」ことの内実が失われてしまうだろう。したがって、「実際に裏切り行動を選択せずに」ということは考えられない。確かに、個々の関係においては、裏切り行動を選択することが問題を生産的に解決することに寄与するとは思えない場合がある。しかし、この関係で、この問題について、この相手に対して自己主張をあえてすることにあまり意味があるように思えない場合にすら、「自己を主張する」態度を保持し続けることが長期的には社会全体を変化させていくのだと考えられる。

次に、「他者に対して徹底的に無関心である」という戦略が拙著の中でどのように位置づけられるのかという疑問に対して答えたいと思う。実はこれと同じ質問を、別の機会に別

の方からいただいた（土場・松村 二〇〇二）。そこで、そのときに私がしたりプライを（表現は少し変わるけれど）繰り返し述べることしよう。

正直に言えば、拙著を準備しているとき、「他者に対して徹底的に無関心である」存在を念頭にはおいていなかった。したがって、この疑問点は、いわば私の盲点だったといえるだろう。そして、このような存在が私の盲点になった理由は、望む望まないに関係なく他者と否応なく関わっていかざるをえなくなるような状況を念頭におきながら考察を進めたからだと思う。ただそうだとしても、今の段階では、轟氏の疑問点に対して二つの観点から答えたい。一つは、他者に対する徹底的な無関心をどこまで一貫させることが可能なのかという観点からである。個別の局面においては、「ゲームをしない」「ゲームから退出する」という行動を選択できる場合がありえる（「引きこもり」も、その一つかもしれない）。しかし、その選択を最後まで完遂することはおそらく不可能だろうし、そうでなくても相当困難なことが予想される。そう考えれば、「ゲームをしない」「ゲームから退出する」を選択した者もいつかは「ゲームに参加する」ことを余儀なくされるだろうし、そのときには拙著の議論が効いてくるのではないかと期待している。もう一つは、他者と積極的に関わることの意義とは何かという観点からである。他者と出会うことで、自らの生き方・価値観を相対化し、より自由にそしてより豊

かに生きていくことが可能になる。そして、「相手に寛容さを示しつつ、自己を主張する」ことは、それを実現するためのもっとも基本的な戦略なのである。したがって、「ゲームをしない」「ゲームから退出する」という選択は、最終的には維持できないだろうし、また仮に維持できたとしても生の可能性を貧しい状態のままにするような消極的な選択でしかないことを主張したい。

最後に、「教育に効果があるとすれば、それは相互理解を目指す戦略が有効であることを意味するのではないか」という疑問点について答えたいと思う。この疑問点を拙著に対してもう少しアイロニカルな表現で言い換えれば、「(知識の共有という意味での)相互理解を目指すことを否定しておくしながら、このような著作を書くこと自体が(知識の共有という意味での)相互理解に何かを期待していることになりはしないか」ということになるだろう。いわば、嘘つきのパラドックスと同型のパラドックスである。

ただ、私自身は、あくまでも知識の共有を目指すような型の相互理解を必ずしも完全に否定しているわけではない。私の主張は、そのような型の相互理解が「知識が共有されていない」ことを問題として主題化しないという人々のマナーによってただ虚構として存在するのだということである。そのような型の相互理解が(虚構として)存在し、そしてそれが存在することでミクロな社会秩序が成り立っているという事

実を決して否定的に評価しているわけではない。問題にしたことは、そのような社会秩序の成立のさせ方が今後次第に困難なっていくだろうということ、にもかかわらずあくまでもこのような型の相互理解に固執すればそのような振る舞いは暴力性を帯びるだろうということである。

したがって、私は知識の共有を目指す教育という営みの効果を信じているし、そしてそのことが拙著の主張と矛盾していたり、拙著の主張を否定していたりしてはと考えていない。ただし付け加えることがあるとすれば、教育による知識の共有の達成は、教える側の「理解してくれた」という思い込みと教わる側の「理解できた」という思い込みによって成立している虚構でしかないということだろう。(さらに付け加えれば、私は、虚構でない「真の」知識の共有というものがあるかどこかに存在するとは考えていない。知識の共有とはつねにそのような虚構でしかありえないのだと考えている。)したがって、知識が共有されているという前提はつねに疑われる可能性に対して開かれている必要がある。もし知識の共有を疑うことが禁止されているならば、それはまさに人々に対して抑圧的に作用するからだ。疑うことを許さない常識とか、慣習とか、規範といったものの抑圧性・暴力性がここにある。当然、教育はこのような抑圧性・暴力性から自由でなければならぬ(とはいえず、現実の教育は、常識や権威にまみれ、しばしば抑圧的・暴力的になる)。



むしろ、私は、知識の共有を目指す型の相互理解と、理解できない部分はそれでも残るといふ「理解できない」ことを理解する型の相互理解を積極的に併存させてよいと考えている。前者への固執が暴力を帰結するように、後者への固執が「対話の拒否」といふ別の暴力を帰結しかねないとも考えるからである。

私からの回答は以上である。単に「著者である」という特権を利用して轟氏の疑問点に答える機会を与えていただいたことに感謝しているが、私の回答も所詮は多くありうる様々な解釈の一つでしかない。もし轟氏が自身の設定した疑問に拙著を離れた立場から回答し、その結果新しい社会理論が誕生すればより刺激的だし、轟氏でなく他の読者についても同様だと思っている。

#### 文献

土場学・松村正治 二〇〇二「グローバル化する現代社会の新たな秩序問題とその解決——教土直紀『理解できない他者と理解されない自己』の書評ゼミ・レポート」『理論と方法』三一号 一〇九—一一七頁

(すと なおき・学習院大学法学部教授)